

民数記16章1-11節 「恵みへの反発」

1A 主の言葉への反発

1B 預言者への非難

2B 新たな目標設定

2A 選びへの妬み

1B 恵みにある差別性

1C 特別な愛

2C 持つ者のさらなる豊かさ

3C 受けるに値しない働き

2B 恵みによる賜物と一致

1C 組み合わせされた一つの働き

2C 置かれている所での満足

本文

私たちの学びは、いつもの聖書通読から離れて、今朝は民数記 16 章 1-11 節を中心に見ていきます。今、読みましたようにここは、有名な「コラの反抗」の場面です。ここでコラがモーセとアロンに訴えていることは、もし人間の国で起こっていることならば、真つ当なことをしていますね。指導者がきちんとその国民を導かないでいる時に、団体行動や恣意行動を起こして、自分たちの訴えを直接、その指導者にぶつける方法です。私たちはテレビ映像などで最近、国会前のデモを見ましたが、周りに警察の人はいますが、それはデモをするのをやめさせるためではなく、むしろデモを守るため、秩序をもって行なうことができるためにそこにいました。それは、私たちの国の憲法でその権利が保障されているからです。私たちの国が民主主義の国だからです。

けれども、人間の国では正しいことでも、私たち信仰者の集まりにおいて同じことをしたらどうなるのでしょうか？イスラエルの民は、荒野において一世代が四十年間さまよわなければいけないことを宣言されました。ですから、彼らはこう思っていました。「きちんと約束の地に導かない指導者だ、その無能さは計り知れないものがある。失敗したのにも関わらず、モーセとアロンは未だ支配の座に居残っている。これは、とんでもないことだ。指導者の座から降りてもらおう。」人間的な視点においては真つ当な行動であっても、神の視点では正反対ですね。神は彼らを「生きたまま地獄に投げ込まれる」という、今まで以上の厳しい裁きを下されました。

この違いは何なのでしょう？それは、私たちは人の国を造ろうとしていないということです。神の国が臨むことを願っています。人の主権ではなく、神の主権が広がることを願っています。ですから、人の権利や主張は限りなく降ろして、神の御心とご計画を限りなく引き上げるように召されています。民主主義ではなく名づけるならば「神主義」です。イエス様を主とし、キリストが頭で

あることを私たちが体を張って示していくのが、信仰者の集まりであり、教会です。

先日の合同修養会で、ある兄弟が興味深いことを分かち合ってくれました。彼は、大学でキリスト教のサークルのリーダーを務めました。そのサークルには、「総会」というものが存在します。そこでそのサークルの運営方針について、会員が意見を述べるのですが、彼はうんざりしたと話していました。そのほとんどは、不満なのだそうです。そして、いつもはおとなしい人もその時ばかりは、不満や怒りを敢えて言い表すのだそうです。彼が言いました。「『こんなことがあって、感謝でした』という話がなぜ出てこなかったのだろう。」

その通りなんですね、「すべての事について、感謝しなさい。(1テサロニケ 5:8)」というのが、神の御心であると聖書には書いてあります。これは自分の感情をすべて押しつぶして、それで感謝を唱えろということではありません。どんなことにおいても、主がそこにおられる。主が何か良いご目的があって、それを許しておられる。このことを信じている心、それを保っていなさいということです。そうすれば、今のこの置かれている状況に感謝することができます。このように、私たちはイエスを主とし、この方に自分の全てを明け渡すように召された者たちとして集まっています。

1A 主の言葉への反発

1B 預言者への非難

そこでイスラエルの民の荒野における歴史を振り返ってみたいと思います。イスラエルの民は、何かにつけ指導者に不満を言っていました。イスラエルがエジプトから出る時、後ろにエジプトの軍隊が迫っている時に、「なぜ私たちがエジプトにいさせなかったのですか。この荒野で死なせるのですか。」と言って、文句を言いました。そして荒野の旅において、モーセに対して絶えず不満を鳴らしていました。

なぜか？モーセが主の御言葉を伝えていた預言者であったから、ということが出来るでしょう。食べる物が無いと言って不平を彼らが鳴らしていた時に、モーセは民にこう言いました。「出エジプト記 16:8 いったい私たちは何なのだろうか。あなたがたのつぶやきは、この私たちに対してではなく、主に対してなのです。」モーセが行っていたのは、主の言葉を伝えていたことです。その御言葉を受け入れ、神を信じて歩むということを、民は求められていました。けれども、その御言葉が今の自分の状況にとってはあまりにも苛酷です。つまり、約束の地に主が導かれるというけれども、今、その約束とは裏腹に今は荒野にいる。そこには大きなギャップがある。約束にしたがって今を歩めと言われてもそんなことはできない、として、それであきらめてしまいます。その時に、その語っている預言者に対して反抗するのです。語っておられるのは神であり聖霊ご自身なのですが、御言葉を取り次いでいる者に非難の矛先を向けます。

そしてついに、彼らはカデシュ・バルネアで、約束の地への入り口のところで、主の言葉を信じることができないと決めてしまい、もう世の中、エジプトに戻りますから新たな指導者を立てますと言

ってしまいました。それで、主はその世代を荒野で死に絶えるようにさせ、そこに四十年間、その時点からは正確には 38 年間ですが、荒野を彷徨わせるようにされたのです。

合同修養会では、こんな勧めの言葉がありました。「御言葉を聞く時に、今の現実には照らし合わせてとても痛い時がある。その時に、その痛みを他の似たような現実を持っている人のところに行くと仲良くなる。ある所までは仕方がないが、そこで共通の敵を作ってはだめ。祈る必要がある。人ではなく、その言葉は主の言葉だから、主の前に持っていく必要がある。」そしてローマ 8 章 14 節を引用しています。「もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。」現実だから仕方がないと言っていたら、死んでしまう。「しかし、あなたのおことばですから」と言って立ち直る時に、御霊によって生きます。それを毎日すること、繰り返すことが「命」という、とのことでした。

2B 新たな目標設定

今のカデシュ・バルネアでの話は、民数記 13-14 章に書いてあります。そして 15 章において、興味深い御言葉があります。「15:2-4 わたしがあなたがたに与えて住ませる地にあなたがたはいり、特別な誓願を果たすために、または進んでささげるささげ物として、あるいは例祭のときに、主へのなだめのかおりをささげるために、牛か羊の群れから全焼のいけにえでも、ほかのいけにえでも、火によるささげ物を主にささげるときは、そのささげ物をささげる者は、穀物のささげ物として、油四分の一ヒンを混ぜた小麦粉十分の一エパを主にささげなければならない。」驚くことに、主は荒野での放浪を宣言したその直後に、新しい世代が約束の地に入ってから行うことを命じられたのです。穀物の捧げ物は、収穫がなければできないこと、つまり約束の地に入っているという前提で語っていることでもあります。

主は、すぐに目標設定をしてくださいました。荒野の放浪があることに目を留めるのではなく、もちろん荒野において主は共に彼らといてくださり、その放浪を付き合ってくださいるのですが、けれども次に向かうべき目標をしっかりと見ることができるよう、主がしてくださいました。これは、とても大切な機転です。荒野を見つめていれば、その信仰の歩みは揺らぎます。けれども、しっかりと前を見つめていれば、それで今の歩みに神は御霊による助けを与えてくださいます。「すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。(ピリピ 3:13-14)」

2A 選びへの妬み

これが、コラの事件の背景です。もう一度、15 章 1-4 節を読みたいと思います。「1 レビの子ケハテの子であるイツハルの子コラは、ルベンの子孫であるエリアブの子ダタンとアブラム、およびペレテの子オンと共謀して、2 会衆の上に立つ人たちが、会合で選び出された名のある者たち二百五十人のイスラエル人とともに、モーセに立ち向かった。3 彼らは集まって、モーセとアロンとに逆らい、彼らに言った。「あなたがたは分を越えている。全会衆残らず聖なるものであって、主がそ

のうちにおられるのに、なぜ、あなたがたは、主の集会の上に立つのか。」4 モーセはこれを聞いてひれ伏した。」

コラや、ルベン族のダタンやアビラムは、約束の地に入る若い世代ではなく、古い世代です。コラは、ケハテ族というレビ族の一氏族に属していた人です。主はレビ族、そしてケハテ族から、ご自分の家を治める指導者を立てられました。一人がモーセ、そしてその兄のアロンです。そしてアロンの家系が祭司の務めをするように神に任じられました。祭司は、主の幕屋の中で奉仕をします。外庭には青銅の祭壇があり、そこにイスラエルの民が携えてきた牛や羊をほふり、主の前に火による捧げ物として捧げます。それから聖所があり、その中に入れば、十二個のパンが供えられた机がありました。そして金の燭台があり、そこに火が灯されています。これらはすべて、祭司が行なう奉仕です。そして大祭司は至聖所の中にも入り、イスラエルの罪のための贖いをします。そして、その他のケハテ族はこれらの幕屋の用具を運搬する奉仕を行なっていました。つまり、契約の箱を運ぶ、パンを供える机、香壇、そして燭台を運びます。

けれども、自分たちが約束の地に入ることができなくなった今、彼らがイスラエルをきちんと導くことができなかつたのに、未だに民を支配しているという強い不満を抱きました。このいびつな構造を打開するために、アロン家にも近い自分が彼らに代わって指導権を取らなければいけないと思ったかもしれません。そしてコラは 250 人のケハテ族を連れて来ます。彼はかなり人気があり、有力な人であったことを伺わせます。そして、コラはルベン族のダタンとアビラムと共謀します。ルベン族も、イスラエルの中では長子であるはずの部族です。ヤコブの預言によってその権利が剥奪されたことが宣言されましたが、それでも長子であるのに、なぜか三男のレビの子孫への待遇が良すぎるという不満を持っていたことでしょう。民数記の初めには、宿営の配置が書かれていますが、ルベン族は宿営の南側にいました。そしてレビ族のケハテ族も南側に位置しています(民数 3:29)。ですから、そこで密かに彼らがモーセとアロンに逆らうために方策を練っていたのかもしれませんが。

1B 恵みにある差別性

そしてコラが反抗した言葉を、注意深く見ましょう。「全会衆残らず聖なるものであって、主がそのうちにおられる」と言っています。これは一見、正しいように聞こえます。確かに、主はイスラエルを聖なる民とされました。しかし、とてつもなく間違っており、結論から申しますと「妬み」の表れです。

1C 特別な愛

最近、ある牧師さんからとても考えさせられる話を聞きました。それは、母の日を教会の中でお祝いするという計画で起こったことです。教会でお祝いするのはやめたほうがよい、なぜなら、子を持たない既婚者がいる。また母親のいない子もいる。母をお祝いしたら、そうしたカーネーションを受け取れない人々が傷を受けるではないか、という声が上がリ、それで母の日を祝おうと思っていた人々がどうすればよいか、分からなくなってしまったという話です。牧師さんも困ってしまいま

したが、私も強く反応しました。「なぜ、素直にお母さんたちをお祝いできないのだろうか？」と思ったのです。この考えは、神の特別というものを否定してしまうのではないか、全ての人が均一ではないのに、と思いました。

そうした反対意見の根っこには「妬み」があります。全ての人に等しくしなければいけない、という考えは、愛また恵みの性質に著しく離れています。私たちは雅歌の学びで学びました。100 人に対して当分してそれを与えるのが愛ではありません。宮廷の中に数多くの色白の美人がいるなかで、田舎娘で非常に不安になっていたシュラムの女に対して、「わが愛する者が娘たちの中にいるのは、いばらの中のゆりの花のようだ。(2:2)」というものでした。こんな差別的な言葉はありません、他の女たちを「いばら」とまで言わしめているのです。しかし、これこそが愛なのです。愛されるべきものがないとみなされている中で、特別に愛されている、好意を持たれているというのが神の恵みなのです。そして神の選びは、そうした恵みに基づいているものであります。

しかも、神の恵みが働くと、そうした特別な愛を注がれている人を祝福するように導かれます。同じくシュラムの女は、なんとソロモンの他の王妃たちやそばめから、ほめられました。ソロモンが言いました。「6:9 汚れのないもの、私の鳩はただひとり。彼女は、その母のひとり子、彼女を産んだ者の愛する子。娘たちは彼女を見て、幸いだと言い、王妃たち、そばめたちも彼女をほめた。」ですから、神の恵みの中では、神の祝福を受けている人々を自分も祝福することができます。

2C 持つ者のさらなる豊かさ

語弊を恐れずに言えば、神の恵みというのはそういった意味で”差別的”です。「神がこの私を、他の人々にまして愛してください、それで選んでくださった。」この真理を受け入れる者が、お返しをすることができないほどその恵みを受け、それで自分自身が、その恵みという大きな川の流れの中にあるようになる。これが主の望まれていることです。「罪が増し加わるところには、恵みも満ちあふれました。(ローマ 5:20)」という、怒濤のごとく流れる恵みに自分もカヌーに乗って川下りするようなものです。タラントのたとえで、主はこう言われました。「マタイ 25:28-29『…だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。」持っている者、すなわち神の恵みを知っている者がますます豊かにされる世界です。

3C 受けるに値しない働き

そして、コラはモーセとアロンが神の家を治めることに妬みを抱きましたが、彼の強い動機にあるのは、「私にもできるのに。」というものでした。自分は彼らよりも悟りがある、彼らよりも能力がある、というものです。ここに、選ばれることについて、召されて奉仕することについての大きな誤解があります。神に選ばれ、召されるのは、神の恵みによります。パウロは自分が使徒として用いられていることを、「生まれた時から私を選び分け、恵みをもって召してくださった(ガラテヤ 1:15)」と言いました。恵みによるのであり、能力ではないのです。思い出していただきたいのは、五時か

らの労務者の話です。朝早くから働いている者と、五時から働いて一時間しか働かなかった者と、その労賃は同じでした。しかも、雇い主はその五時からの男たちから賃金を払ったのです。自分がしてきたことではなく、もっぱら神の恵みによって用いられるのです。1

恵みを知るために阻害となる、恵みを受け取るのを妨げる最も大きな要因は、「自分ができると」いうものです。神の恵みというのは、そこには神の美しい働きがあるので、自分というものが無くなる世界です。自分が何かしたから、ではない世界です。むしろ、自分が何をしても全く実が結ばれていない、私にはできません、という絶望感にも近い訴えを持っている人に、神は敢えて「あなたをわたしは選んだ。」と宣言されます。四十年間、羊飼いとして過ごしたモーセに、主は、「エジプトに行き、パロに告げなさい。」と言われました。エッサイ家の末っ子ダビデに油を注ぎなさいと主はサムエルに言われました。まだ若いエレミヤに、主は諸国民にわたしのことばを語り告げなさいと言われました。イエス様は三度もご自分を否定したペテロに、「羊を飼いなさい。」と言われました。キリスト者を捕縛し、殺したユダヤ教テロリスト、パウロに「福音を宣べ伝えなさい」と命じられました。

ですから、主に召されて奉仕の務めを行なう、主に用いられる時は、その人が優れているからではなく、主が一方的な恵みで選ばれているからです。そしてもちろん、自分ができないということも百も承知で、それでも「主が言われるのでしたら」という理由だけで主についていく人が、主に用いられます。主は、能力をもとめられません、従順を求められます。

2B 恵みによる賜物と一致

そうした中で、キリストの体というのは、体としての機能を果たします。「ローマ 12:3-5 私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」与えられた恵みによって、それぞれの信仰の量りにしたがって、神は私たちを各器官にしておられます。それぞれが異なる賜物、働きが与えられていますが、それぞれが一つにつながれており、それぞれが相働くことによって御体として機能しています。

1C 組み合わされた一つの働き

ところが、コラはそう考えませんでした。「5 彼(モーセ)はコラとその仲間すべてに言った。「主は明日の朝、主に属する者、聖とされる者を示して、その人を御自身のもとに近づけられる。すなわち、主のお選びになる者を御自身のもとに近づけられる。6 次のようにしなさい。コラとその仲間はすべて香炉を用意し、7 それに炭火を入れ、香をたいて、明日、主の御前に出なさい。そのとき主のお選びになる者が聖なる者なのだ。レビの子らよ、分を越えているのはあなたたちだ。」コラは、モーセに分を越えていると言いましたが、モーセは彼こそが分を越えていると言いました。今、ここで香炉をもってこさせ、その香をたいて主の前に出なさいと言っています。覚えていますか、か

つてアロンの息子、ナダブとアビフは異なる火を主の前に捧げたために、主の前から火が出て、彼らを焼き尽くしてしまいました(レビ 10:1)。コラがもし、祭司の務めに選ばれている者でなければ、彼も滅びなければいけません。

教会では、人が火によって焼かれるということはないでしょう。しかし、教会がキリストによって聖められたところであるということを知る必要があるでしょう。それぞれが、その分を果たす時に、主の前で行っているという恐れが必要です。そして、その分を果たすことはそれが直接、他の御体の部分につながっていることを知ることは大事です。ある方がこう言ってくださいました。「私は、新しく信じた方を自分独りで導くことなど、とても恐ろしくてできない。」そうです、一人の魂が救われた、そしてその人をキリストの弟子としていくということは、主の前で大きなお仕事です。私は牧師であります、私でも到底、独りでできません。

教会ごぞつてのチームワークの必要があります。綿密な意思疎通が必要です。自分は良かれと思ってやっても、責任者や他に関わっている人に伝えなければ、良い物が悪い物になります。例えると、どんなにおいしいケーキを作っても、他の仲間に伝えなければそれはテーブルに出てこないで、いずれ虫が湧いてかえって全体に迷惑をかけます。ですから、主に仕えるとは、互いに交わることです。仕えながら交わり、また交わりによって仕えることができます。そして共に祈る時間を増やす。こうやって行なっていく共同作業です。

2C 置かれている所での満足

8 モーセは更に、コラに言った。「レビの子らよ、聞きなさい。9 イスラエルの神はあなたたちをイスラエルの共同体から取り分けられた者として御自身のそばに置き、主の幕屋の仕事をし、共同体の前に立って彼らに仕えさせられる。あなたたちはそれを不足とするのか。10 主は、あなたとあなたの兄弟であるレビの子らをすべて御自身のそばに近づけられたのだ。その上、あなたたちは祭司職をも要求するのか。11 そのために、あなたとあなたの仲間はすべて、主に逆らって集結したのか。アロンを何と行って、彼に対して不平を言うのか。」

コラの行なっている奉仕は、主に対するとても尊い奉仕でした。幕屋の用具を取り外し、運搬し、そして再び降ろすということは、それ自体は単純な作業かもしれませんが、主の前で行っている聖なる作業でありました。しかし、コラはそのそばで祭司が奉仕を務めていること、自分が二番目にいることに我慢がなりません。近くでアロンやその息子を見ていて、そして結果は、荒野での放浪です。「私だったら、こうやるのに。」という不満が溜まってきたのでしょう。それで、主に命じられたこと、その召しではなく、自分がこうすればうまく行くという考えで事を進めました。そしてアロンの家系ではなく、自分がその祭司の務めを行ない、人々を集めて新しい共同体を作れば、それでこの失敗を改善できると思ったことでしょう。

しかし、その結果は見てのとおり、大混乱と数多くのイスラエル人の死であります。私たちが人

間的な方法を取る時、それが自分の思いや気持ちに沿ったものであったとしても、結果は悲惨になります。もう一度思い出してください、主は恵みによって人を選ばれます。その選ばれた人は、何でもない人、知恵の欠けた人、弱い人、そういった人々を敢えて選ばれるのです。さらに、神ご自身の働きが、人間においては無駄に見えることもあります。理解できないことがあります。どうして四十年間、無駄に荒野を彷徨わないといけないのでしょうか？しかし、神の栄光のゆえにそれは必要なことだったのです。ある時には、理にかなわないことも神は行われます。

しかし不思議なことに、こうした不完全な中にある完全な神の働きを見るのです。これは出来ないと思われるのに、なぜか主の働きが完成されているという不思議です。どうか、こうした恵みの働きを見抜く力を身に付けてください。パウロは、このことを次のように表現しました。「2コリント 4:7-10 私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方に与っていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。」

そこで、私たちに必要なのは「満足した心」です。これがコラに欠けていたものです。主にお仕えしているのだという満足です。与えられている務めは、どんなに小さく見えてもそれは聖なる仕事です。それがトイレ掃除であろうとも、人の前に立つ賛美奉仕であろうとも、主の前では同じように聖なる務めです。それらが人に対してでなく、人との比較でもなく、主に対して行なっているということに満足があります。そして、主に対して行なっていることを身につけると、そこにイエス様の道、イエス様のご奉仕が見えてきます。福音書にあるイエス様の公生涯を、聖霊の力によって自分も辿ることができます。主が共におられるということ、発見することができます。主の御心を行なっているのだという、ちょうど十分に食事を取ったのと同じように、満ち足りた心が伴うのです。